HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	陳, 静静
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13405号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74482
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jingjing_Chen_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　陳　静静

主査　教　授　池　田　証　壽
審査委員　副査　教　授　加　藤　重　広
副査　教　授　近　藤　浩　之

学位論文題名
『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

幕末明治期の日本で造語された、いわゆる新漢語は、来日した中国人留学生によって中国語に流入し、その後の中国語に大きな影響を与えた。たとえば、「哲学」（西周）、「人格」（井上哲次郎）は翻訳による新漢語であり、「経済」「社会」などは既存の漢語を使って西洋概念を表わすために転用した新漢語である。日本語における漢語は、中国語から借用した語のことで、日本語語彙の区分の一種である。固有日本語の和語（大和言葉）、借用語である洋語（外来語）とあわせて、語の出自による分類の一つである。近代日本語研究では、幕末明治期の新漢語がどのように生み出されたのか、17 世紀以降、中国で出版された西洋知識に関する漢訳洋書や各種の英華字典を探索し、学術用語を中心とした調査研究を積み重ねてきた。一方、19 世紀後半以降、中国語への逆輸入が顕著に認められる新聞雑誌と辞書を中心とした調査研究も活発となっている。沈国威、荒川清秀、陳力衛らの研究は先駆的業績に位置付けられる。二つの言語の間で語の借用が交互に行われることは、通常、語彙交流と呼ばれて研究されて来たが、幕末明治初期の日本語と清末の中国語との相互関係はさまざまな要因が関連し、日本と中国とに存する資料の相互関係を綿密に検証する必要があるため、新たな資料の発掘と分析手法の開拓を目指す意味を込めて、本研究では中日語彙交渉の研究としたものである。従来の新聞雑誌に関する研究では、『時務報』（1896-1898）に関する沈国威の成果が大きく、翻訳者の古城貞吉と翻訳内容について詳論している。また同時期に出た『実学報』（1897-1898）の本格的な研究としては、秦春芳の成果が唯一であって、日本の新聞から中国語に移入された 812 語を抽出・分類しているが、残された課題も少なくなく、研究の端緒に就いた段階と言える。

本研究の成果として、第一に特筆すべきは、『実学報』の「東報輯訳」「東報訳補」欄（以下、東文報訳と呼ぶ）とその典拠となった日本の新聞記事（以下、ソース記事と呼ぶ）とを詳細に検討して、ソース記事を確定したことである。『実学報』の原紙について国内外の図書館の所蔵状況を調査する一方、ソース記事掲載の日本の新聞も国内の図書館の所蔵状況を調査し原紙に当たり直すという面倒な確認作業を丁寧に行っており、従来の研究の不備を修正するとともに、新資料を見出すなど、着実な成果となっている。

成果の第二としては、『実学報』東文報訳とソース記事とを対照するという方法で、中国人による日本語翻訳の問題点を多角的に分析した点をあげることができる。ソース記事「廣東金礦の發見」には孫福保・程起鵬両氏による二種の訳文を比較して原文の日本語理解と新語使用を分析した点、「日曜日（猶言禮拜日）」「方針（謂指南針）」のような注釈付き語を多数取り上げて原文の漢語の理解を検討した点はこれまでの研究にない視点と評価できる。「時間」の用例分析も語誌研究も手

堅い。

成果の第三としては、『実学報』のソース記事に見える外来語の意訳・音訳の方法、さらに音訳における参考書籍の探索した点を挙げることができる。「華盛頓（ワシントン）」のように漢字に片仮名ルビを付けて表記されるものと「カリフオルニア」のように片仮名だけで表記されるものとに二分して、それらをどのように音訳または意訳しているかを検討し中国語への定着の状況を『実学報』に即して記述した点、『実学報』の音訳語の作成に日本語教科書『東語入門』（1895）と『策鰲雑摭』（1889）収録の「音注日本字母正草二体」の参照を論証した点は、『実学報』にとどまらず、この当時の新聞の音訳語を研究するための新たな視点を提供したものとして評価できる。

本論文は、近代日本語研究会、中日対照言語学研究会、漢字文化圏近代語研究会などでの口頭発表を基礎としており、その一部は日中語彙交流研究の学術誌として評価の高い『或問』に査読付き論文として掲載されている。

・学位授与に関する委員会の所見

幕末明治期の日本語と清末の中国語との関連に関する研究は、近年活発化している分野であり、新たな資料の紹介が相次いでいるが、本論文は、清末に刊行された『実学報』という新聞に着目して、この分野の研究を大きく前進させた。丹念な資料調査と用例分析に基づく実証的な研究姿勢は学位授与にふさわしい水準と言える。

審査の過程を通して指摘された問題点も少なくない。孫福保・程起鵬両氏の翻訳態度の相違について程氏は新語を積極的に使用するのは新語の内容を吟味することなしそのまま利用したとも解釈できる点、音訳語の分析に際して中国語方言の影響があるとするが可能性のレベルにとどまっておりさらなる検討が必要と考えられる点、などである。論文の日本語表現は一定水準以上であるが、細部において改善の余地がある。このような問題点と課題は、今後の研究の進展によって十分に解消することが可能であり、本論文の意義を損なうものではない。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。